

## 日本語教育振興協会令和2年度日本語学校教育研究大会所感

開催日:2021年2月27日(土)、28日(日)

テーマ:「日本語学校教育の挑戦~with コロナ、postコロナ、そしてnew normalへ~

文責:武田俊一

### 【所感】

#### 1.全体所感

- (1)新型コロナ禍の現状(デジタルツール活用のみならず)を一過性のものとしてではなく新たな常態として捉え、即応していくことの重要性を認識した。
- (2)デジタルツールの浸透は、(教師、学校、日本語教育界の)教育の本質・存在意義を問い直す契機になっており、ブレない軸(理念、使命)を持つことが大切であると感じた。
- (3)また、教師の役割も、知識と知識を結び付け、かつ、学習者による自律的学習が可能となるよう、ファシリテーター機能に加えコンサルタント機能が求められている、と認識した。

#### 2.初日:「ポストコロナ時代の日本語教育を考える」

- (1)紹介あった各校が、手探りながらも、状況の変化(新型コロナ)へ即応する努力を不断かつ果敢に挑戦してきていることを知り刺激になった
- (2)「オンライン」の限界もある中で、学校への連帯意識・帰属意識を高めることが、学習効果を高めることに繋がる」とのコメンテータの言は示唆に富むものと思われた。

#### 3.二日目:

- (1)「日本語学校教育のニューノーマルを考える」「オンライン授業のデザイン学び続ける日本語教師」  
デジタルツールの浸透により、従前以上にVirtualとRealの違いは何かを認識し、その上で、教師、学校の存在価値を問い直すことが求められていること、そのためにも、今一度、教育の本質を問い、理念・使命を明確にすることが問われていることに得心した。
- (2)パネル発表(“ちよと見“)
  - 1)「経営面から見る日本語教育機関の新型コロナ対応」TIJ 徳倉俊一理事長  
・事業継続性を高めるべくビジネスモデルの再構築に取り組んでいる概要を知ることができ有益であった。  
・経営判断の基本は数字だが、それに加え、掲げる理念に拘り、携わる人々の熱意・想いを加味し、事業運営に当たっていると発言は印象に残った。
  - 2)「来日前オンデマンド教材の作成と今後の可能性」石川学園横浜デザイン学院佐々木渉講師  
・オンデマンド教材(非同期型)の作成/活用は、作成の労力を要するものの、リピート使用する内容については、一定の学習効果も望め業務の効率化に繋がると感じた。